

きよ す じょう か まち  
清洲城下町遺跡

## 1. 調査の経過

清洲城下町遺跡は、濃尾平野を南流する木曾川水系五条川の中流域に形成された自然堤防帯及びその後背湿地上に位置する。遺跡の発掘は、昭和59年度より、環状2号線建設に伴う事前調査として継続して実施されてきたが、61年度からは、新たに五条川河川改修関連の調査も加わり、今年度の調査面積は、5カ所の調査区で、合わせて7935m<sup>2</sup>にも及んだ。

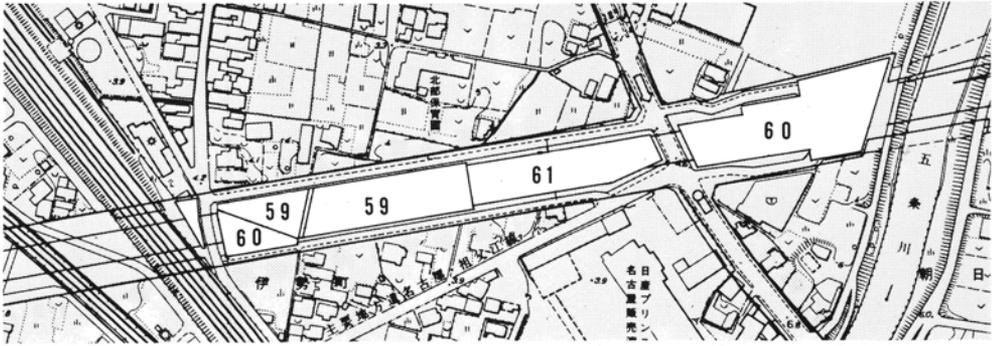
調査の結果、全ての発掘区において、良好な状態の遺構、遺物群を確認することができた。検出された遺構、遺物群は、概ね、13Cから14Cを中心とするⅠ期、15C末から17C初頭にかけてのⅡ期（城下町期）及びそれ以降明治時代に至るまでのⅢ期（宿場町期）の三分区が可能であったが、これは従来成果を追認する形となった。

遺構・遺物の出土状態は、Ⅱ期の遺構が全ての調査区で確認されたのに対し、Ⅰ期の遺構は、五条川右岸（環状2号線用地内）で若干みられた程度であり、一方Ⅲ期の遺構は、逆に左岸（河川改修用地内）で集中して発見されている。また、左岸の発掘区では、少量ながら、7～8Cと考えられる須恵器片もみられ、自然堤防上には当該期の遺構が存在する可能性も考えられる。

## 2. 清洲城下町遺跡の地区設定について

環状2号線関係の調査では、これまで、五条川以東を「朝日西」遺跡、以西を「清洲城下町」遺跡としてそれぞれ調査を実施してきた。しかし、一応発掘調査を終了した現段階では、その最も中心的な時期、即ち「城下町」の時代においては、両者は、「清洲城下町」という南北2.7km、東西1.5kmにも及ぶ巨大な都市遺跡のなかの、機能を異にした、各「部分」であったと考えられるに至った。また、今年度からは、新たに、五条川河川改修に伴う調査が双方にまたがる形ではじまり、その混乱をさける為にも、両者を一つの遺跡と考え、総括的な地区設定をすべきであるという結論に達した。

地区割は、城下町の最盛期と考えられる「清須越」直前の「堀」の復元を基とし、地区を分割し、各地区の中心部分となる字名をその名称とすることを原則とした。これに従えば、従来の「清洲城下町」遺跡は、「神明町」、「古城」、「御園」の三地区に区分されることになる。また、「朝日西」遺跡は、本来ならば、旧「朝日村」の中心部分でもあり、「朝日」地区とすべきであるが、既に、「朝日西」の名称で外的にも資料を公開していること、また、その東側に展開する弥生期を中心とする「朝日」遺跡との名称の混乱をさける為、現行の名称を生かし、例外的に「朝日西」地区とした。（梅本博志）



環状2号線関係



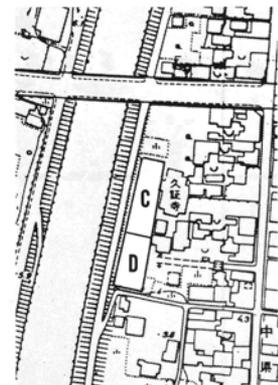
第1図 地区の設定と調査区の配置



五条川河川改修61A区



五条川河川改修61B区



五条川河川改修61C・D区

### 3. 環状2号線関係

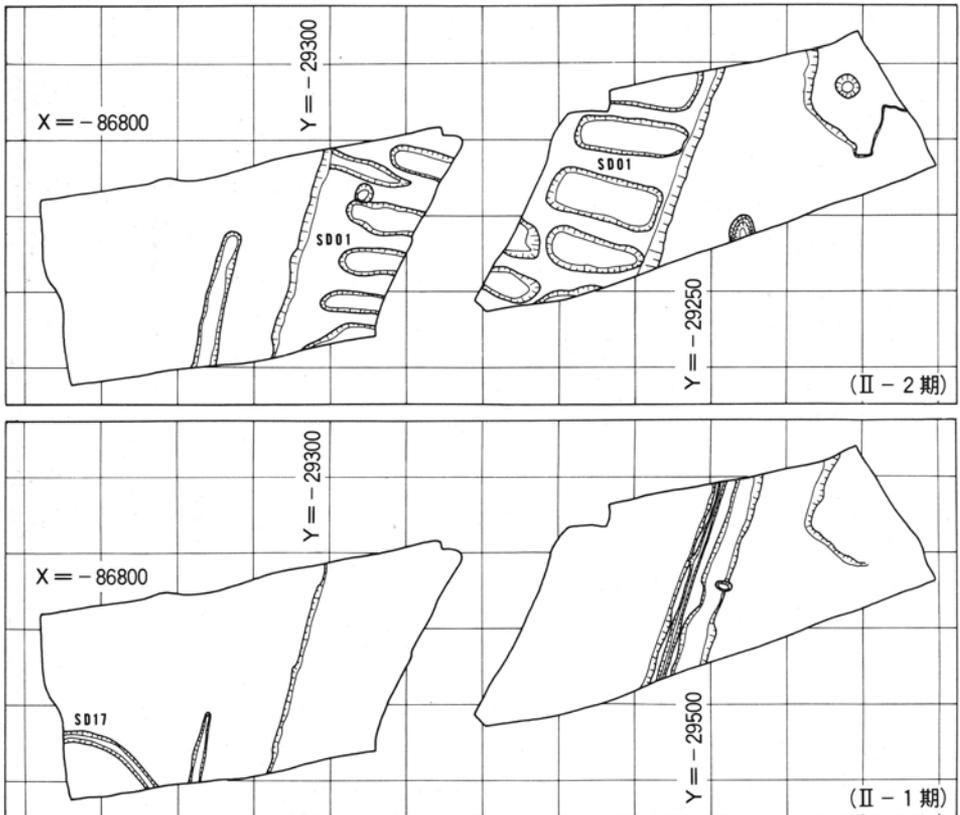
#### (1) 主な遺構

本年度の発掘調査では、59年度調査区と60年度調査区の間、約3900 $\text{cm}^2$ を対象とした。調査の結果、検出された遺構群はⅠ～Ⅲ期にわたり、なかでも、Ⅰ・Ⅲ期の遺構が希薄であったのに対し、Ⅱ期のそれは極めて良好な状態で検出された。

Ⅰ期は、調査区の大半が沼沢地の状況を呈していた時期であり、遺構も北東部の高まりでわずかに確認できたにとどまった。

Ⅱ期にはいと1mにもおよぶ大規模な整地が行われ、遺構の多くがその整地層を掘り込む形で検出された。Ⅱ期は盛土の層位より前・後期にさらに小区分できた。主な遺構は南北の走向をもつ大小の溝・井戸・土坑などである。なかでも注目されるのは、調査区中央で検出された幅45m・深さ2.0mを測るⅡ-2期の大溝(SD01)である。この溝は、蓬左文庫所蔵の「春日井郡清須村古城絵図」によれば、清洲城を巡る堀のうち、「水堀」に比定されると考えられるものである。

「清須越」後のⅢ期には、大溝を埋めて耕地化するなど、再び大規模な整地が行われたため、明確な遺構を検出し得なかった。



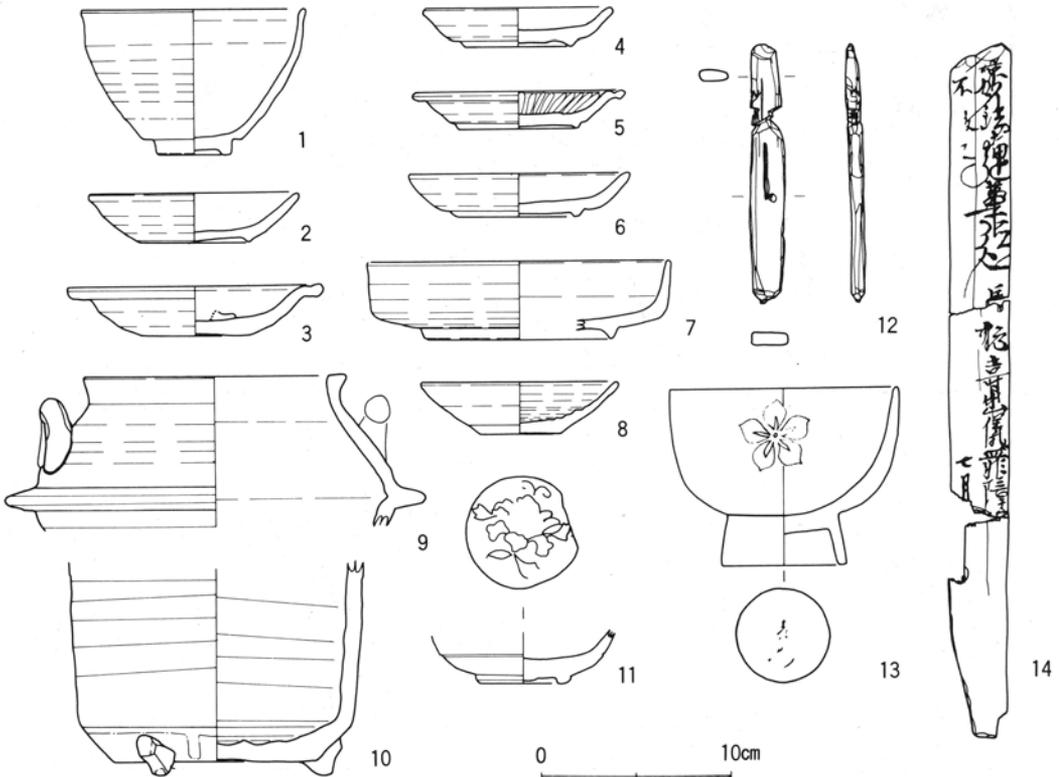
第2図 環状2号線関係遺構配置図

(2) 出土遺物

出土品は、陶磁器類・瓦類でその大半を占めるものの、漆塗りの椀・曲物・桶などの木製品も多く、200点以上を数えた。これらの遺物のほとんどはⅡ期に属するものである。

〈Ⅱ-1期〉溝(SD17)より出土の板塔婆(第3図14)で、「無妙法蓮華經□聡寿出儀罪障」の経文が読み取れる。また、木製品の多くはこの時期の整地層中より集中して出土しており、中には番傘の柄などこれまでに例を見なかったものも含まれる。

〈Ⅱ-2期〉大溝(水堀)よりの一括出土品(第3図1~10・12・13)で、1は高台部に化粧掛けのない鉄釉天目茶碗、2は全面鉄釉の皿、3は鉄釉落し蓋である。4・5はいずれも灰釉が施された皿、6・7は長石釉の皿および向付、8は無釉の皿である。9はこの時期には少い陶製の鉄釉羽釜、10は底部に三足がつく大型の鉄釉香炉である。12は人形で、周縁は面取りされ、目・鼻・口は切り込んで表現されている。13は外面が黒漆、内面が朱漆塗りの椀で、外面3ヶ所に施された模様は朱漆で描かれている。この他、少数ではあるが中国陶磁も出土している。11は整地層中より出土した白磁皿である。また、水堀の中から、総破片数6021点の瓦が出土した。内訳は平瓦4767点、軒平瓦43点、丸瓦796点、軒丸瓦38点、面戸瓦332点、その他(飾瓦・鯪瓦含)45点である。(細野正俊)



第3図 環状2号線関係出土遺物(14は1/8・他1/4)

#### 4. 五条川河川改修

##### (1) 主な遺構

本年度より始まった五条川河川改修に伴うA区、B区、C区、D区の発掘調査では、I期、II期、III期の三時期にわたる遺構を検出することができた。I期については、各調査区ともに遺構が希薄であり、II期になって密度の高い遺構群がみられた。III期はB区を中心に良好な遺構を検出した。検出された遺構は、大小の溝、井戸、廃棄土坑等である。

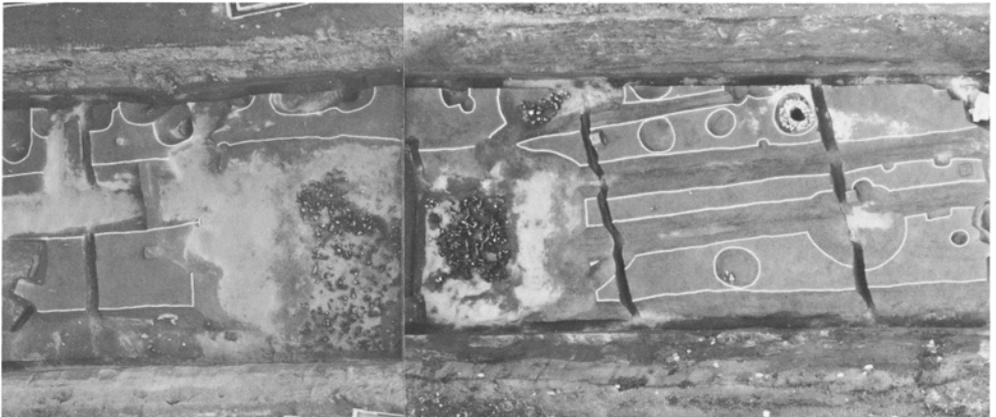
**A区：**II期とIII期の遺構が重なり、密度の高い遺構群を検出した。II期の遺構では、溝6、井戸4、土坑5を検出し、井戸S E 05からは良好な一括遺物が出土した。

**B区：**II期の遺構として南北に並走するS D 05とS D 11がある。III期の土坑S K 45からは豊富な遺物が出土し、東西8m、南北6m、深さ1mを測り、北に開く馬蹄形を呈す。

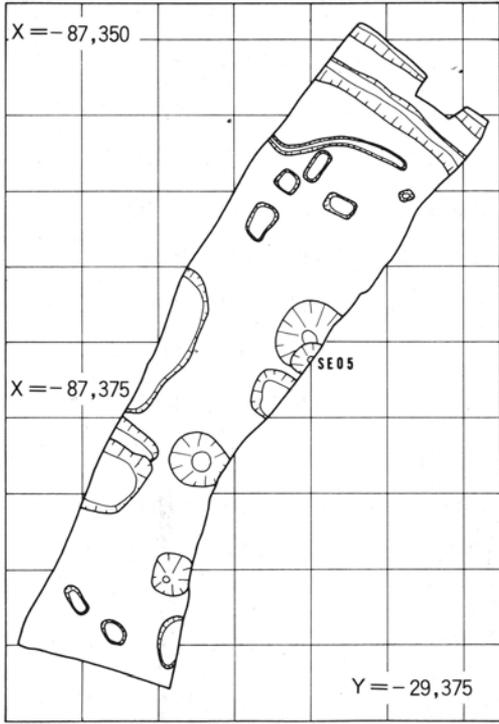


D区 S E 01

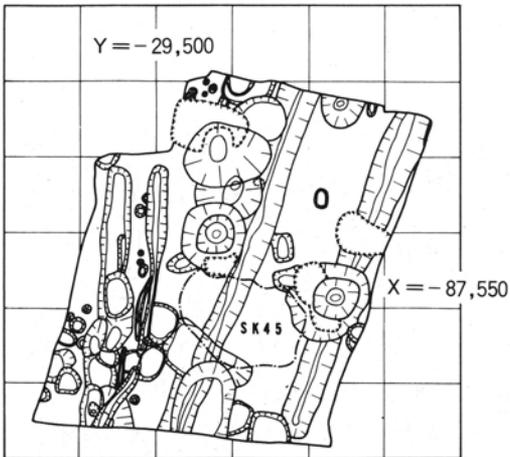
**C・D区：**II期の遺構として溝3、井戸2、土坑4、III期の遺構では溝1、井戸1、土坑3を検出した。C・D区にまたがるII期の土坑S K 05は南北18m、現存巾東西7m 20cmを測り、調査区外西へ広がっている。下層より多量の良好な遺物が出土した。D区のII期の石組井戸S E 01は短径1m 60cm、長径1m 75cm、深さ1m 90cmを測り、底に桶が埋設されていた。



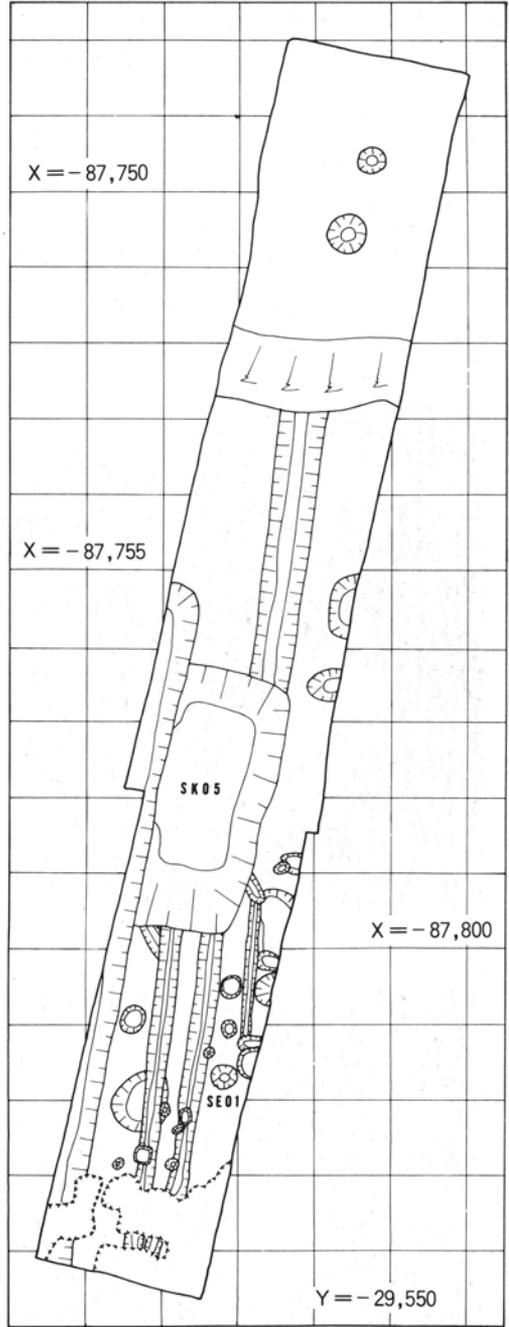
C・D区 S K 05



A区



B区



C.D区

第4図 五条川河川改修関係遺構配置図

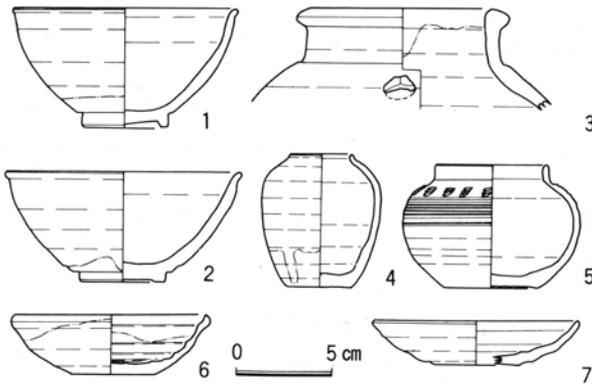
(2) 出土遺物

出土遺物は、陶磁器類がその大半を占め、漆器の椀・箸・笊・柄杓、曲物、下駄などの木製品類と古銭、釘、小柄などの金属製品類と硯、砥石、茶臼、宝篋印塔などの石製品類が出土している。これらの遺物群の大半がⅡ期に属するものであるが、B区を中心にⅢ期の遺物群も出土している。Ⅱ-1期の遺物として61A区SE05出土品と61D区包含層中より出土した内・外面に灰釉を流し掛けた鉄釉平碗（第6図1）がある。Ⅱ-2期の遺物として61D区SE01と61C・D区SK05の出土品がある。またⅢ期の遺物として61B区SK45の出土品がある。以下は各時期の代表的な遺構よりの出土品についての概略である。

**SE05** 61A区井戸よりの出土品（第5図）で、1・2は鉄釉天目茶碗、3は鉄釉壺、4は鉄釉茶入れ、5は鬼板化粧の小壺、6・7は無釉の皿である。16世紀前半。

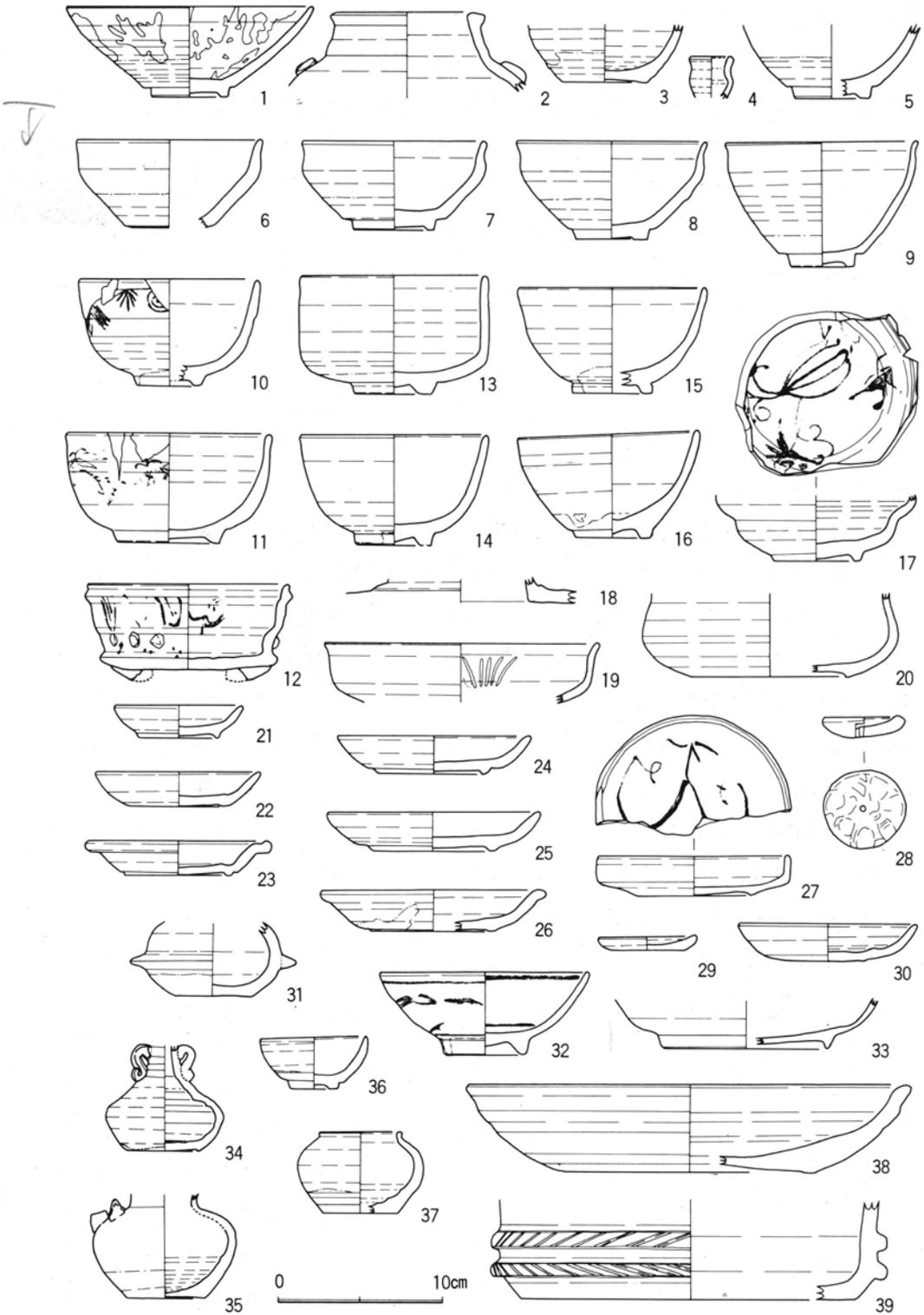
**SE01** 61D区石組み井戸よりの出土品（第6図2～5）で、2・3は鉄釉壺、4は無釉の小壺で桶の中の埋土中より出土、5は鉄釉天目茶碗である。16世紀末より17世紀初頭。

**SK05** 61C・D区土坑よりの出土品（第6図6～39）で、瀬戸・美濃窯の灰釉・鉄釉製品や志野・黄瀬戸・織部の製品が、また常滑窯の甕、備前窯の播鉢・小壺、唐津窯の碗・皿などがあり、中国陶磁の青磁・白磁・染付の碗・皿、土師質土器の鍋・釜・皿が出土しており、その大部分が瀬戸・美濃窯製品で占められている。漆器の椀、朱漆の箸、笊、下駄、竜形頭部、柄杓等の木製品や小柄、釘等の金属製品、硯、砥石、宝篋印塔等の石製品が出土している。6は内面が長石釉、外面鉄釉の天目茶碗、7～9は鉄釉天目茶碗、10・11は鉄絵長石釉丸碗、12は播座の鉄絵長石釉向付、13は長石釉半筒茶碗、14は灰釉丸碗、15・16は唐津窯の碗、17は絵唐津皿、18は肩部に銅緑釉のかかった織部の小壺の破片、19・20は黄瀬戸の向付、21は灰釉小皿、22は内凡の灰釉皿、23は内凡の灰釉折縁皿、24～26は長石釉皿で、25の内面には鉄絵が施されている。27は長石釉鉄絵向付、28～30は土師質



第5図 61A区SE05出土遺物(1/4)

土器の皿で、28は手捏小皿で1ヶ所の穿孔が、29・30は底部に糸切り痕が残る皿である。31は黒色瓦質の小型羽釜、32は中国陶磁の染付碗、33は白磁の皿、34は小型鉄釉双耳花瓶、35は鉄釉水注、36は鉄釉小杯、37は鉄釉小壺、38は無釉大皿、39は鬼板化粧の緒桶である。16世紀末より17世紀初頭の良好な一括資料である。（小澤一弘）



第6図 61C・D区出土遺物(1/4)

S K 45 61B区土坑より、瀬戸・美濃系陶器・磁器を中心とする陶磁器類と漆器の椀、箸、筴、柄杓、桶、櫛、笛、傘、下駄等の木製品類と硯、石臼等の石製品類が多量に出土した。ここでは陶磁器について記述する。



S K 45遺物出土状況

碗類は大きく3類に区分できる。碗Ⅰ類は丸碗形である(第7図8・9)。大きさも大小あり、

施釉方法なども陶器では灰釉、上・下掛分、銚手と多様である。磁器は染付がほとんどである。陶器・磁器とも瀬戸・美濃系が多量に出土している。碗Ⅱ類は半筒形を呈するものである(第7図1・2)。陶器・磁器ともにみられるが、陶器は瀬戸・美濃系、磁器は肥前系とはっきり区別されている。碗Ⅲ類はいわゆる広東形と呼ばれる、胴部から口縁にかけて直線的に立ち上るものである(第7図14)。この器種も碗Ⅰ類同様瀬戸・美濃系がほとんどであるが、特にその中でも陶器が多数を占める。瀬戸・美濃系の磁器にはコバルト釉と思われる発色を示すものも少なくない。出土陶磁器全体の中で碗類は359点を占め、出土量においては最も多い。その中では瀬戸・美濃系陶器が最も多く206点、次いで瀬戸・美濃系磁器112点、肥前系磁器29点、その他・不明磁器12点である。

皿類は127点を数える。陶器は72点出土しており、そのかなりの数が瀬戸・美濃系である。磁器は55点出土しており、瀬戸・美濃系6点、肥前系19点である。皿類でも碗Ⅱ類と同じく陶器は瀬戸・美濃系、磁器は肥前系という傾向がみられる。陶器は口部直径が20cm前後の大型の皿と口部直径が10cm前後の小型の皿に区分できる。大型のものとしては、いわゆる石皿、馬ノ目皿、油皿、平皿(第7図26)がある。小型のものは、平皿(第7図21・23)のみである。磁器は口部直径15cm前後の中型の皿(第7図22)、口部直径10cm以下の小型の皿がある。中型は全て肥前系であり、平皿と深皿の2種類が見られる。小型は瀬戸・美濃系であり、ほとんどが平皿である。施釉方法は、陶器は呉須、磁器は染付である。皿類は大きさの違いがそのまま瀬戸・美濃と肥前系の違いに反映されている。また皿類の中では、産地は不明だが貝殻模様の紅皿(第7図19・20)も多く出土している。

鉢類は55点を数える。その中で台所用鉢が23点と多くを占める。これは播鉢・練鉢・片口鉢である。播鉢は内面に「㊦」の刻印のあるものがほとんどである。他に盛付け用の鉢(第7図18)、植木鉢、餌鉢などがみられる。

972点 - 100%

表-1 窯業生産地別出土状況

瀬戸・美濃系 (83.8%)		①	④	
陶器 (66.0%)	磁器 (17.8%)		⑤	⑥

① 肥前系磁器 (7.5%) ② 信楽系陶器 (0.5%) ③ 備前系陶器 (0.1%) ④ その他・不明 (8.0%) ⑤ 陶器 (3.3%) ⑥ 磁器 (4.7%)

表-2 主要器種別出土状況

器種	瀬戸・美濃系		肥前系陶器	信楽系陶器	備前系陶器	その他・不明		総点数		
	陶器	磁器				陶器	磁器	陶器	磁器	陶器
碗類	206	112	29				12	206	153	359
皿類	70	6	19			2	30	72	55	127
灯明具	72	2	2			1		73	4	77
徳利・瓶類	81	14	3	2	1	2		86	17	103
鉢類	36					19		55		55
蓋類	51	14	8	3		4		55	25	80
小杯	9	9	6			1	2	10	17	27
神仏具	8	6	2				1	8	9	17
猪口	9	1	4					9	5	14
水滴		7					1		8	8

※ 上記の数字は%以上残存する陶磁器を1点に数えた数値

灯明具は76点を数える。その中で72点が瀬戸・美濃系である。灯明具には灯明皿（第7図11）灯明皿受皿（第7図12）、乗燭、注口を持つ灯具が出土している。灯明皿と灯明皿受皿はほとんどが鉄釉を施してある。

徳利・瓶類は103点を数える。徳利は3類に区分できる。徳利Ⅰ類は胴部三個所に凹部がみられるものである（第7図25）。徳利Ⅱ類は丸胴・首長の器形（第7図24）、徳利Ⅲ類はいわゆる「通い徳利」と称されるものである。出土量としては徳利Ⅲ類が最も多い。この中には「清洲本町・柴木屋」「清洲宿・笛」「二ツ杵・井筒屋」と地名・屋号の判読できるものがあり、当時の清洲宿周辺の流通圏の一端を理解する上で重要な資料となろう。瓶類には小瓶、花瓶、土瓶、汁次が含まれる。小瓶は陶器・磁器とも瀬戸・美濃系が多くを占める。花瓶は全て瀬戸・美濃系陶器である。土瓶はほとんどが瀬戸・美濃系陶器であるが、中には、白濁釉でイッチン描きの施された信楽系陶器もわずかにみられる。汁次（第7図13）は全て鉄釉の施された瀬戸・美濃系陶器である。

蓋類は80点を数える。そのうち55点が陶器である。蓋類は大きく4類に区分される。蓋Ⅰ類はつまみが環状についた、皿を上下逆にした形をしている（第7図3）。これは碗・鉢に用いられるものである。瀬戸・美濃系の陶器が多くを占める。蓋Ⅱ類は凹形をなし、端部がつまみよりも上にくるものである。これには紐状のつまみ（第7図5）と花形のつま

み(第7図4)の2種類がみられる。瀬戸・美濃系陶器が大半を占めるが、わずかに信楽系陶器もみられる。蓋Ⅲ類は底面に環状の舌を持つものである(第7図6)。これも蓋Ⅱ類同様大多数が瀬戸・美濃系陶器であるが、やはりわずかに信楽系陶器がみられる。蓋Ⅵ類は上面が平坦であり、つまみの付かないものである(第7図7)。これは蓋物に用いられる蓋である。蓋Ⅱ・Ⅲ類同様瀬戸・美濃系陶器が多くを占めている。

小杯は27点を数える。陶器10点、磁器17点を数え、若干磁器の出土量が多い。陶器はほとんどが瀬戸・美濃系で占められている(第7図16)が、磁器は瀬戸・美濃系9点、肥前系6点と出土量にあまり差異はみられない。瀬戸・美濃系磁器の中にはコバルト釉と思われる発色を示し、器厚も1mm前後と極めて薄手のものもみられ、明らかに19世紀中期末頃に比定されるものである。

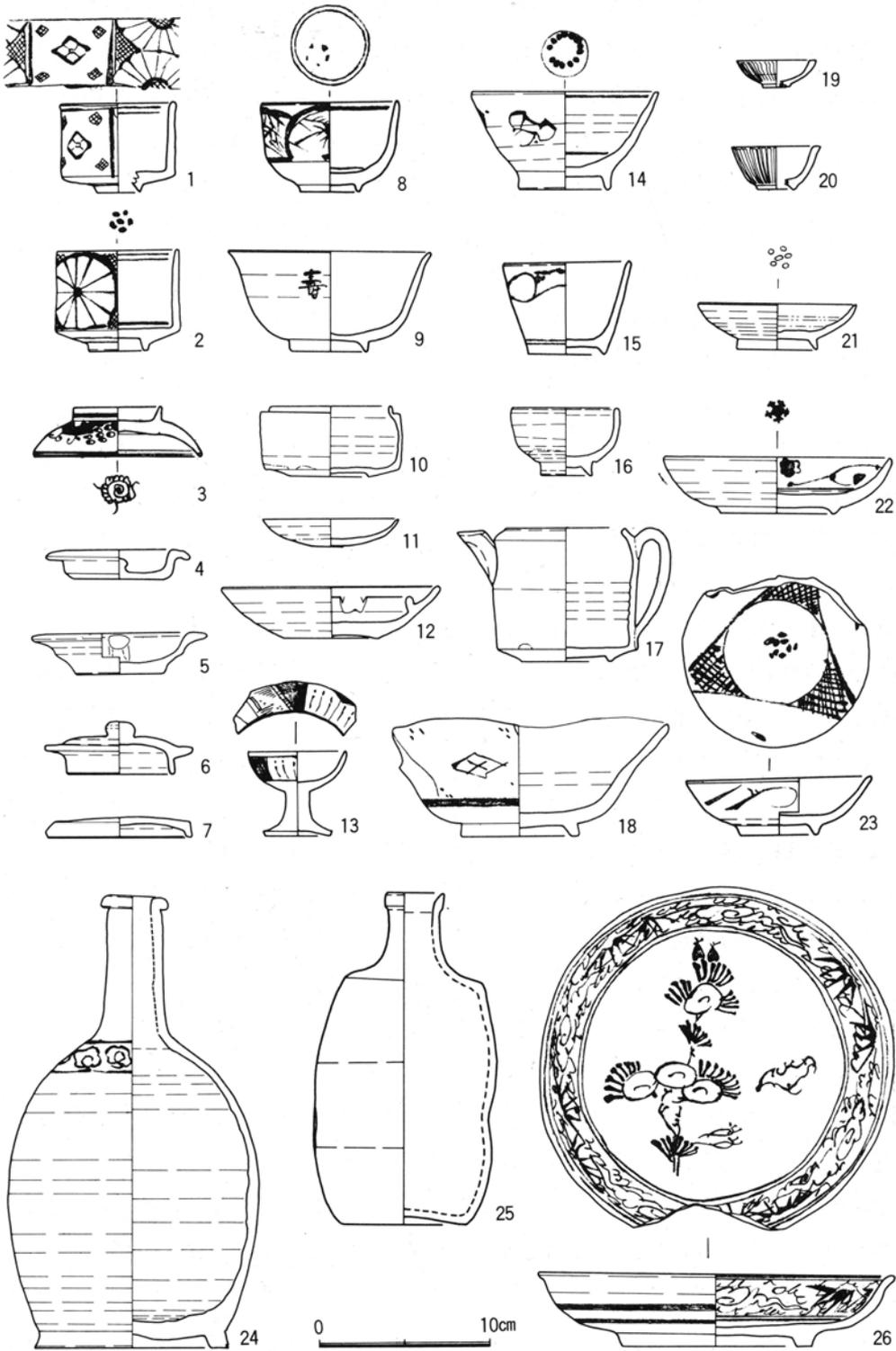
神仏具は17点を数える。全て仏餉具(第7図13)であり、陶器8点、磁器9点、とほぼ同量出土している。産地は陶器・磁器とも瀬戸・美濃系が14点と多くを占める。

猪口(第7図15)は14点と出土量はあまり多くない。陶器は瀬戸・美濃系、磁器は肥前系とはっきり区別されており、碗・皿などと同じ傾向を示している。

水滴は全て磁器である。箱型と水注型の2種類がある。瀬戸・美濃系が7点、その他・不明が1点出土しており、ほとんどが瀬戸・美濃系である。瀬戸・美濃系の中にはコバルト釉と思われる発色を示す釉調のものもみられる。

他の器種として、十能、合子、甕、戸車、急須、塙、蓋物(第7図10)、瓶掛などが出土している。

出土した陶磁器を生産地別にみると極端な片寄りを示す(表-1参照)。瀬戸・美濃系83.8%(陶器66.0%、磁器17.8%)、肥前系磁器7.5%、信楽系陶器及び備前系陶器は1%未満、その他の産地及び産地不明は8.0%である。このように瀬戸・美濃といった一大窯業生産地を真近にひかえており、陶磁器については十分に供給されていたわけである。しかし一方では、瀬戸・美濃系を用いる器種と肥前系を用いる器種とが明確に分けられるものがある点にも留意しなければならない。また出土品の大多数が雑器で占められており、当時の日常生活道具を理解するうえで好資料である。SK45の出土陶磁器は18世紀末から19世紀中頃までに限られ、出土状態から一時期の廃棄と考えられる。よってSK45の時期は19世紀中頃(明治初期)に想定できる。また、SK45から検出された陶磁器の中には完形のもものが少なくない。このことから、生活状況の急激な変化などにより、多くの陶磁器を一気に投棄した可能性をも考えられる。(中野良法)



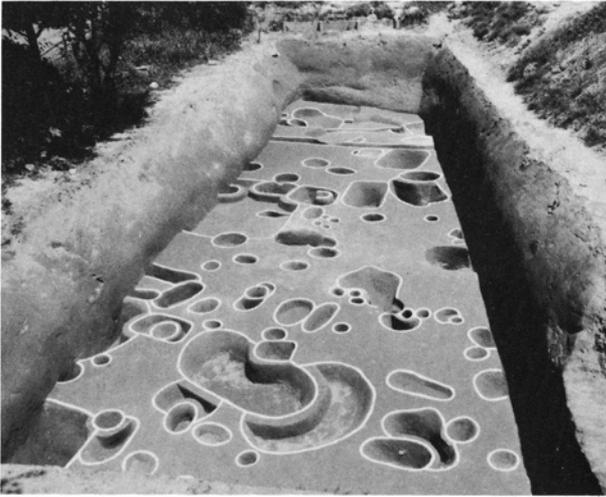
第7図 61B区SK45出土遺物(1/4)

(3) 試掘調査

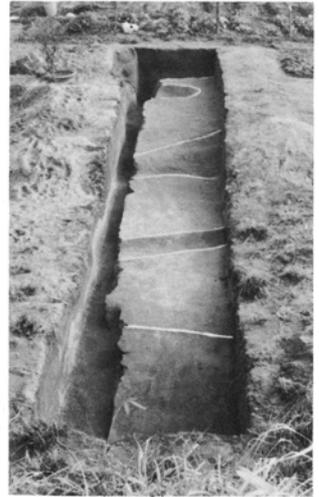
遺跡の存否及びその範囲確認を目的とする試掘調査を清洲町の五条川河川改修関連用地内の8地点で行った。試掘面積は合計 690m<sup>2</sup>で、T.T.1～5は7・8月に、T.T.6～8は12・1月に調査した。

各試掘区とも、溝・土坑などの遺構が認められ、山茶碗・施釉陶器・天目茶碗・播鉢・中国陶磁・土師質製品（羽釜・内耳鍋・皿）などの破片を出土した。遺構の疎密・出土量の多少はあるが、各試掘区とも清洲城下町遺跡Ⅰ期～Ⅲ期に該当する遺跡である可能性が強い。今回の試掘調査で、名鉄本線以南への遺跡の広がりを確認した。

T.T.2では、清洲城下町遺跡Ⅱ期の遺構（溝・土坑・ピット）が多く、山茶碗・天目茶碗・播鉢・土師質製品などを出土した。そのほか、T.T.1では青磁や長石釉鉄絵皿の破片が見られ、T.T.4では緑釉陶器・古瀬戸の小片や筭が出土した。T.T.6～8は、名鉄本線以南に位置する。出土遺物は少ないが、土坑・溝などの遺構を検出した。（水谷朋和）



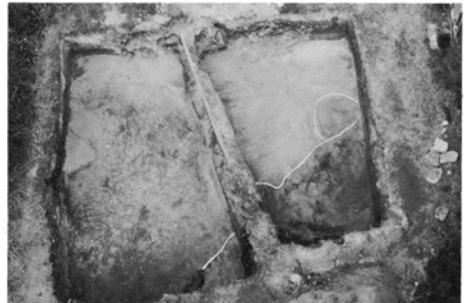
T.T.2 全 景 (南方より)



T.T.8 全 景 (西方より)



T.T.5 北西部 (南方より)



T.T.6 全 景 (南方より)

## 5. まとめ

1. 今年度の発掘調査のうち、環状2号線関係の調査区では、巾45m、深さ2.0mにも及ぶ大溝を検出することができた。この大溝は、「清須村古城絵図」では、内堀から中堀へ向かってのびる南北方向の大規模な堀で、「水堀」の注記のあるものに比定されるものである。この大溝は、元来、自然の沼沢地であったこの地点に、Ⅱ-2期段階において、大規模な盛土を施し、その結果、残された部分を「堀」として使用していたものと考えられる。

また、「堀」の中心部には、60年度調査の「中堀」にみられたものと同様の舟底状の土壌群が検出され、「中堀」同様、湧水施設としての機能を果たしていたものと思われる。

2. 一方、五条川河川改修関係の調査においては、本丸推定地の対岸にあたる五条川左岸地区について、様々の知見を得ることができた。

五条橋近くの61A区では、Ⅱ期、Ⅲ期共、遺構、遺物の密度が極めて高く、この地点が城下町期、宿場町期を通して清洲の町の中心部分を形成していたことを証明している。

また、61C・D区においては、Ⅱ-2期の遺構、遺物が豊富にみられるのに対し、Ⅱ-1期については、若干の遺物がみられるのみで、明確な遺構の存在が確認されなかった。これはこの部分が「外堀」により囲まれた朝日西地区と同様、Ⅱ-2期における城下町の拡張にあたり、はじめてその「城下」に組み入れられた部分であった為と考えられる。

3. 出土遺物については、五条川河川改修に伴う、61B区SK45と61C・D区SK05の遺物群が質・量共に特筆すべきものであった。前者はこれまでまとまった資料の出土がなかったⅢ期末の、また後者は、Ⅱ期最末からⅢ期初頭にかけての基準的な資料になると考えられる。

(梅本博志)



環状2号線関係発掘区全景(Ⅱ-2期)